

その作品の数々は、彫塑という分野。四十五年から自由美術展に出野にもたらした新風だった。制作品し、五十一年に会員推挙。このテーマは「負」の世界。死んだ年も、釧路美術協会会員にも推挙されたたちの声を聞きたいという。五、翌五十二年には全道美術協会十一年の全道展で協会賞を受賞し、会友と、歩みは着実だ。ことしの初夏、札幌の大同ギャラリーで初の個展を開いた。二十数点の展示作品は「地中からのメッセージ」であり、大地に置くのがふさわしい。

造形分野に新風送る

『死者の声』表現したい

米坂ヒテノリ氏らと造形作家集団をつくり「ジャック・アンド・ベティー展」を毎年開いている。鉄片、針金などさまざまな素材と遊ぶ。造形の普遍化への試みだ。その七八年展の会場で、芸術賞受賞の知らせを聞いた。

「この仕事を一生のものにします。それだけにうれしい」と語った。三十五歳。釧路市富士見二の

先に開かれた第六十一回釧路美展の出品作品は「木霊に聞く」―石ころの頭部が多い彫塑群の中で異彩を放った。半具象の範ちゅうに入るのだろうか、中江さん自身は、そう分類づけられることに不満らしい。

「彫刻は自分の言いたいことの表現です。作家はそれぞれ、自分に適した表現方法を持つべきだと思います。私の作品はむしろ具象ですよ」。

四十八年に郷里釧路に帰ってのち、地元の公募展などに登場した

た「地殻交信機」は、地上と地下の接点である基石だ。

釧路湖陵高時代、米坂ヒテノリ氏（釧路短大教授）からデッサンの手ほどきを受けた。武蔵野美術大彫刻科に進み、四十三年に卒

自らの思いを木に刻み込む中江さん

彫 塑

中 江 紀 洋 さん

